名護市我部祖河方言の名詞アクセント

人文学部日本文化学科

2021(令和 3)年 1 月提出

鈴木　千遥

要旨

本稿では、沖縄県名護市我部祖河の方言の名詞アクセントについて、筆者自身の調査結果をもとにその体系を記述する。

我部祖河方言の名詞アクセントを単純語と複合語に分けて考察したところ、4モーラまでの単純語では、a~c の三つの型が対立する「三型アクセント」であるという結果が得られた。しかし、我部祖河方言の単純語アクセントにおける「三型アクセント」は一般的なN型アクセントの体系とは異なり、「語の長さが増えると型の対立数が減る」という特徴を持つ。具体的には、3モーラまでの名詞では三つの型の対立が見られるが、4モーラ（以上）の場合には型の対立数が二つに減る。その点で、我部祖河方言の単純語アクセントは特異であると言える。複合語アクセントは、「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」という現象が観察された。また、ピッチの上昇位置については、前部要素の型と後部要素のモーラ数により予測が可能である。

我部祖河方言では単純語でも複合語でも「4モーラ以上の語にb型が一つも観察されない」という大きな特徴が見られる。この現象について説明するために、複合語アクセントの分析から「a型は無核型、b・c型は有核型である」と考え、a~c 型のピッチパターンをを記述し直した。そして、単純語では4モーラ（以上）の語において表面上に現れるピッチパターンがb型とc型とで一致すること、複合語では複合語アクセント規則が働くことが原因となり、3モーラまでの名詞に見られた「文節の最終モーラのみが高くなる」というb型が見られなくなっていると考えられることを述べた。

目次

１．はじめに 1

２．調査概要 2

３．単純語のアクセント 3

４．複合語のアクセント 6

５．なぜｂ型が無くなるのか 8

５．１　複合語アクセントからの示唆 8

５．２　単純語におけるｂ型の消失について 8

５．３　複合語におけるｂ型の消失について 9

５．４　まとめ 12

６．おわりに 12

参考文献 14

【資料】我部祖河方言名詞アクセント一覧 15

１．はじめに

本稿では、沖縄県名護市の我部祖河（がぶそか）と呼ばれる地域で話される方言(以下、我部祖河方言)の名詞アクセントを記述する。

現在、琉球方言の多くは、二型あるいは三型アクセントの方言であることが明らかになっている（木部 2019:137)。しかし上野（2018）によれば、現在までに二型アクセントとされている首里方言や那覇方言について、首里方言は四型アクセント、那覇方言は五型アクセントである可能性があるなど、琉球方言のアクセント体系については未だ不明な点が多いと言える。

例えば、本稿で扱う我部祖河方言を含む名護市域の方言のアクセントに関する研究としては、Lawrence(1990)や小川（2012)、仲宗根（1983）などがある。しかし、名護市域の全ての方言のアクセントが明らかになっているわけではない。児玉（2014）は、本研究で扱う我部祖河方言に地理的に近い名護市羽地地区川上方言のアクセントについて扱っており、当該方言のアクセントを以下のように記述している。

【名護市羽地地区川上方言のアクセント(児玉 2014:31)】

（１）単語単独の場合

2 音節語：L＄H[1]　…語末音節のみ高い。

L＄HL　…2 音節目に下降調が見られる

H＄L　…高く始まり下降する。

1 音節語：ML　…低く始まる下降調。

HL　…高く始まる下降調。

（２）助詞「が」が接続した場合

2 音節語：L＄H(＄H)　…低く始まり上昇する。

L＄L(＄H)　…低く始まり助詞だけが高い。

L＄H(＄L)　…低く始まり上昇した後助詞で下降する。

1 音節語：HL＄(L)　…下降調に助詞が低く続く。

以上のように、名護市我部祖河に近い地域の方言のアクセントについて、現時点で分かっていることは限られており、当然、我部祖河方言のアクセント体系についても詳細な調査はなされていない。本稿では、我部祖河方言の名詞アクセントについて、筆者自身が行った調

[1]H は高い音調(high)、L は低い音調(low)、M は中間的な高さの音調(middle）を表し、＄は音節境界位置を表す記号である(児玉 2014:28)。また、括弧内は 1 拍助詞の音調を表す(児玉 2014:28)。

査結果をもとに分析し、その体系を示す。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2 節で調査概要について述べ、3 節以降で調査結果の整理・分析を行う。具体的には、3 節では単純語、4 節では複合語のアクセントについて記述する。5 節では、我部祖河方言の名詞アクセント体系における大きな特徴である、「4 モーラ以上の語に b 型が一つも観察されない」という現象について、その背景にあるメカニズムを考察する。最後に 6 節で全体のまとめをする。

なお、本稿では以下の記号を使用する。

[：　ピッチの上昇
]：　ピッチの下降
＝：　接語境界
＋：　複合語の境界

２．調査概要

調査協力者は、沖縄県名護市我部祖河出身の六十代女性である。調査方法は、オンライン（ZOOM）を用いた聞き取り調査（全九回）である。具体的には、名詞単独と、名詞に助詞（～が）と簡単な述語を加えた例文の聞き取りを行った。

先行研究などで、琉球方言の多くが二型あるいは三型アクセント体系であるとされていることから、我部祖河方言の名詞アクセントも二型あるいは三型アクセント体系である蓋然性が大きいと考えられる。調査語の選定にあたってはその点を考慮し、五十嵐（2017）における「琉球語アクセント調査票 160」の語彙を中心とする名詞 268 語（方言での言い方がない等の理由で方言形を得られなかったものを除く）を調査語とした。この五十嵐の調査票は、琉球方言のアクセント体系について初期的な調査を行うことを意図して作られたものである。記載されているのは、1）琉球祖語におそらく遡り、2）琉球語諸方言に現在も広く用いられ、3）諸方言間のアクセント型の対応が規則的な語に限定されており、この調査票を用いることで、我部祖河方言のアクセント体系の概要を明らかにできるものと考えた。

ただ、五十嵐（2017）には 4 音節以上の語は記載されていない。上述の通り、我部祖河方言の名詞アクセントも二型あるいは三型アクセント体系である蓋然性が大きいが、上野（2020b）では、従来二型あるいは三型とされていた那覇方言のアクセントが五型あるいは多型アクセントである蓋然性が大きいことを指摘している。つまり、我部祖河方言が多型アクセントである可能性がないわけでもないのである。また、上野(2018:102)が指摘するように、3 モーラまでの単純語のアクセントからは二型あるいは三型アクセントであるように見

える場合でも、4 モーラ以上の語を含めると多型アクセントであることが分かる可能性もある。この点も考慮し、本稿では 4 モーラ以上の長い語も調査した。4 モーラ以上の調査語彙については、上野(2020a)の調査語彙を参考にした。

なお、3 節の脚注 3 で述べるような、名詞の前に連体詞が付く場合のアクセントについても明らかにするために、我部祖河方言の一部の名詞(30 語)については、その前に連体詞（この）を付けた場合のアクセントについても調査を行った。

３．単純語のアクセント

調査の結果、我部祖河方言の名詞アクセントは以下（表１）のように、「ピッチの下降の有無」と「ピッチの上昇位置の違い」によって a~c の三つの型に分けられた。なお、3 節で扱う名詞は 4 モーラまでの単純語であり、4 モーラ以上の複合語については 4 節で扱うこととする。

（表１）

	a 型	b 型	c 型
2 モーラ	[kiː 「毛」	kiː[「木」	[meː] 「前」
助詞「～が」(=ga)	[kiː=ga]	kiː[=ga]	[meː]=ga
3 モーラ	paː[naː 「鼻」	panaː[「花」	haː[mi] 「亀」
助詞「～が」(=ga)	paː[naː=ga]	panaː[=ga]	haː[mi]=ga
4 モーラ	sa[kazuki 「盃」	×	gara[saː] 「カラス」
助詞「～が」(=ga)	sa[kazuki=ga]		gara[saː]=ga

上野(2012:45)によれば、N 型アクセントは「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数（N）以上に増えていかない体系」と定義される。表 1 より、我部祖河方言の名詞のアクセントは、(4 モーラまでの範囲ではあるが）語の長さが増えても型の対立数が三つよりは増えないことから、「三型アクセント」であると考えられる。

また、我部祖河方言では3モーラまでの名詞では三つの型の対立が見られるが、4モーラ以上の場合には型の対立数がa型とc型の二つに減り、「4モーラ以上の語にb型が一つも観察されない」[2]という現象が観察される。上野(2012:45)によれば、N型アクセントの型の数は一般に、「1拍語から一定数Nで一貫するタイプ」と「短い場合はN以下で始まり、ある長さでNに達した後はNで通すタイプ」とがある。我部祖河方言の単純語のアクセントは、語の長さが増えると型の数が減っており、上野(2012:45)で示されるタイプのどちらにも当てはまらない、珍しいアクセント体系を持つ方言であると言える。

以下(1)〜(3)で、a~cの三つの型の特徴について説明する。

(1) a型

a型は、名詞単独・助詞付き共に前から1モーラもしくは2モーラ目からピッチが上昇し、文節内にピッチの下降が出現しない。a型の名詞の多くは以下(例1)のように、一つの語でピッチの上昇位置が異なる二通りの言い方が出現したが、どちらも話者に許容された。このことから、a型におけるピッチの上昇位置が第1モーラからか第2モーラからかという違いは、弁別的ではないと考えられる。

(例1)「酒」

上昇位置	単独	助詞付き
1モーラ目	[saki	[saki=ga]
2モーラ目	sa[ki	sa[ki=ga]

さらに、名詞の直前に連体詞「この」を付けた場合のアクセント[3]は、以下(表2)のようであった。

[2] この現象はUwano(2018)の定義からは、「中和」でないと考えられる。Uwano(2018:129)によれば、ある環境では対立するアクセント型の区別が別の環境において無くなる現象を「中和」と呼ぶ。さらに、「中和」は語単独でなく、直前や直後の語を含めたアクセント単位全体で引き起こされる現象としている(Uwano 2018:130)。我部祖河方言におけるb型の消失は、これらの条件に当てはまらないため中和ではない。

[3] 服部(1937[1959 :371-373])によれば、名護市に近い地域である与那嶺の方言のアクセントにおいて、名詞単独では対立するアクセント型を持つ語の前に標準語の「この」に対応する連体詞などを付けると、その対立が無くなるという現象が見られるという。しかし、筆者の調査では、我部祖河方言でこのような現象は見られなかった。

（表２）

型	連体詞「この」＋名詞		連体詞＋名詞＋助詞「～が(=ga)」
a	「この鼻」	[kunu] pa[naː	[kunu] pa[naː =ga]
		[kunu panaː	[kunu panaː =ga]
b	「この花」	[kunu] pana[ː	[kunu] panaː [=ga]
c	「この亀」	[kunu] haː[mi	[kunu] haː[mi] =ga

このとき、b 型と c 型は直前に連体詞が接続しても名詞は必ず低く始まり、連体詞から名詞にかけて高いピッチが続くことはない。一方 a 型は、b・c 型と同様の音調が出現することに加え、連体詞から名詞にかけて高いピッチが続く音調が出現するものもあった。したがって、b 型と c 型の名詞は必ず低く始まるが、a 型には名詞が必ず低く始まるといった制約はないと考えられる。

以上のことから、a 型においてピッチの上昇位置が第 1 モーラからか第 2 モーラからか、という違いは弁別的ではないと言える。結局、a 型は「第 1 モーラか第 2 モーラからピッチが上昇した後、下降が起こらない」型であると記述できる。

（２） b 型

b 型は、名詞単独・助詞付き共に文節内にピッチの下降が出現せず、低く始まった後、文節内の最終モーラのみが上昇する型と記述できる。ただし、b 型については後でさらに詳しく見る（5 節参照）。

（３） c 型

c 型は、名詞単独・助詞付き共に語の最終音節のみが高い型と記述できる。

単純語のアクセントにおいて注意すべきなのは、「文節の最終モーラだけが高い」という意味での b 型が出現するのは 3 モーラ名詞までで、4 モーラ以上の名詞では一つも観察されないということである。このことについては後述する(5.2 節参照)。

いずれにしても、4 モーラまでの単純語のアクセントを整理した結果、我部祖河方言の単純語のアクセントは三型アクセントであり、その三つの型はひとまず（１）～（３）のように記述できる。ただし、「文節の最終モーラだけが高い」という意味での b 型が出現するのは 3 モーラまでの名詞で、4 モーラ以上の名詞では複合語の場合も含めてそれは一つも観察されない。これは上野(2012:45)が、N 型アクセントの型の数は一般に「1 拍語から一定数 N で一貫する」か「短い場合は N 以下で始まり、ある長さで N に達した後は N で通す」かであるとしたのに反するものであり、その点で我部祖河方言の単純語アクセントは特異であると言える。

４．複合語のアクセント

複合語のアクセントを分析した結果、我部祖河方言では「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」という現象が観察された。以下(表３)は、複合語を前部要素の型ごとに分類し、それぞれのモーラ数ごとにピッチ下降の有無の数をまとめたものである。

（表３）

前部要素	モーラ数(前＋後＝全体)	下降無	下降有	計
a型	2+1＝3	1	0	1
	2+2=4	3	0	3
	2+3=5	1	1	2
	3+2=5	1	0	1
b型	2+1=3	0	1	1
	2+3=5	0	6	6
	2+4=6	0	2	2
	3+3=6	1	2	3
c型	2+2=4	0	1	1
	2+3=5	0	1	1
	3+2=5	0	1	1
	3+3=6	0	3	3
	5+3=8	0	1	1

表３より、前部要素がａ型の場合、複合語全体のピッチパターンとしては、ピッチの下降が起こらない「無核型（平板型)」となることが分かる。例２の複合語「竹林が」と「上り坂が」における前部要素「竹（da[ki)」「上り（nu[bui)」はどちらもａ型の語であるが、これらの複合語のピッチパターンは下降の無い無核型（平板型）である。

（例２）「竹林が」　da[ki+buku=ga]　←　ａ型「竹」　da[ki　/　da[ki=ga]
　　「上り坂が」　nu[bui+zaka=ga]　←　ａ型「上り」　nu[bui　/　nu[bui=ga]

さらに、無核型の複合語において、「後部要素が３モーラ以上のときは、後部要素の前から２モーラ目（それが特殊モーラのときは１モーラ目）からピッチが上昇する。」という規則があることが考えられる（例３）（例４）。

（例３）「鼻水が」　pa[na+dai=ga]
「袖口が」　su[di+gutʃi=ga]
「竹林が」　da[ki+buku=ga]
「上り坂が」　nu[bui+zaka=ga]

（例４）「後ろ姿が」　atu+ʃi[gata=ga]
「立ち話が」　tatʃi+ba[naʃi=ga]
「作り話が」　tsukui+ba[naʃi=ga]
「（平らな）ざるが」　mui+[ʤo:ki=ga]
「（天井から下げる）ざるが」　sagi+[ʤo:ki=ga]

例３は、後部要素が２モーラの語からなる無核型の複合語で、全て前から２モーラ目からピッチが上昇する。一方、例４は後部要素が３モーラ(以上)の語からなる複合語である。このとき「後ろ姿が」「立ち話が」「作り話が」は、後部要素（ʃigata/banaʃi）の前から２モーラ目からピッチが上昇する。「（平らな）ざるが」「（天井から下げる）ざるが」は、後部要素（ʤo:ki）の前から２モーラ目が特殊モーラであるため、ピッチの上昇位置が１モーラ分前(左)にずれ、後部要素の前から１モーラ目からピッチが上昇する。

次に、前部要素がｂ型あるいはｃ型の場合について見る。まず、前部要素がｂ型の場合、文節内のどこかでピッチが下降する「有核型」となる。例５の複合語「島国が」「山登りが」は有核型であるが、それらの前部要素「島（ʃima[:)」「山(jama[:」はｂ型の語である。

（例５）「島国が」　ʃima+gu[ni:]=ga　←　ｂ型「島」　ʃima[:　/　ʃima:[=ga]
「山登りが」　jama+nu[bui]=ga　←　ｂ型　「山」　jama[:　/　jama:[=ga]

前部要素がｃ型の場合も、ｂ型と同様に複合語全体は「有核型」となる（例６）。

（例６）「下り坂が」　uri+za[ka]=ga　←　ｃ型　「下り」　u[ri　/　u[ri]=ga
「お釣り(余り銭)が」amari+zi[ni:]=ga　←ｃ型「余り」ama[ri　/　ama[ri]=ga

以上のように、我部祖河方言では「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」という現象が観察される。上野(2012:52)によれば、「外輪式」と呼ばれる方言では「前部要素の核の有無が複合語全体の核の有無に対応する」という複合語アクセントに関する規則性が見られるという。我部祖河方言における上記の複合語アクセントは、これに類するものと言え、実現するピッチパターンからしてもａ型を「無核型」、

b・c 型を「有核型」と考えて良さそうである。このことについては次節で詳しく述べる。

また、複合語アクセントにおけるピッチの上昇位置については、前部要素が a 型の語の場合、後部要素のモーラ数から上昇位置を予測することが可能である。前部要素が b 型と c 型の語の場合は、モーラ数に関係なくどちらの型も語の最終音節のみピッチが上昇する。

さて、このように複合語アクセントについて整理・分析してみると、複合語の場合も単純語と同様に、3 節で述べた「文節の最終モーラだけが高い」という意味での b 型が一つも観察されないということになる。我部祖河方言の名詞アクセントにおいて、単純語でも複合語でも「4 モーラ以上の語に b 型が一つも観察されない」という現象は、当該方言の大きな特徴である一方で、分析上の問題点であると言える。

５．なぜ b 型が無くなるのか

我部祖河方言の名詞アクセントでは、単純語でも複合語でも「4 モーラ以上の語に b 型が一つも観察されない」という現象が観察された。本節では、何故「4 モーラ以上の語に b 型が一つも観察されない」のか、という点について議論する。

５．１　複合語アクセントからの示唆

ここで手がかりとするのは、4 節で扱った複合語アクセントである。既に述べたように、我部祖河方言では「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」。そして、これが、外輪式アクセント方言の複合語アクセントにおける「前部要素の核の有無が複合語全体の核の有無に対応する」というアクセントの規則性に類するものであるということも既に述べた。

仮に、我部祖河方言における複合語アクセント規則が外輪式アクセントにおけるそれと全く同じであるならば、基本的に無核型の複合語の前部要素としてのみ現れる a 型は無核型（平板型）であり、有核型の複合語の前部要素としてのみ現れる b・c 型は有核型（起伏型）であると考えられる。このことを手がかりに、以下では単純語と複合語との場合に分けて、4 モーラ以上の語の場合に「文節の最終モーラだけが高い」b 型が観察されない現象について議論する。

５．２　単純語における b 型の消失について

我部祖河方言の単純語の名詞アクセントにおいては、3 節で述べたような a~c の型が観察された。この三つの型のピッチパターンについて、先に述べた「a 型は無核型、b・c 型は有核型である」という前提で再整理すると、以下のように記述できる。

〈a 型〉無核型： 前から 1 モーラもしくは 2 モーラ目から上昇する。ピッチの下降はない。
〈b 型〉有核型： 前から 3 モーラ目に「上げ核」がある。つまり、前から 3 モーラ目の後で上昇し、その後すぐに下降する。ただし 3 モーラ以下の文節の場合は、文節の最終モーラのみが高くなる（「花」… pana[:)。
〈c 型〉有核型： 語の最終音節に下げ核がある。つまり、語の最終音節が高く現れ、その後下降する。

b 型と c 型のアクセントをこのように記述すると、以下の 4 モーラの語は b 型として分析しても、c 型として分析しても、実現するピッチパターンは同じになる（例 7）。

（例 7）「虱」 ʃira:[mi / ʃira:[mi]=ga
「昔」 muka:[ʃi / muka:[ʃi]=ga
「ミミズ」 mimin[ʤa / mimin[ʤa]=ga

すなわち、例 7 で示した語は、a~c 型のピッチパターンを上記のように記述すると、それぞれの語のピッチパターンについて、それが b 型であるのか c 型であるのかを決定することができないのである。

こうして、我部祖河方言の単純語において、4 モーラ（以上）の語に「文節の最終モーラだけが高い」b 型が観察されないことが説明できる。つまり、b 型と c 型は本来異なるアクセント型でありながら、4 モーラ語の場合にたまたま両者の上昇・下降位置が一致し、表面上 b 型と c 型のアクセントが区別されなくなっているのだと考えられる。

5．3 複合語における b 型の消失について

複合語において、3 節で述べた「文節の最終モーラだけが高い」b 型と一致する型が観察されないのは、それが複合語であるためとするのが最も単純な考え方であろう。ただ、そのように考えたとき、その複合語アクセント規則は 4 節で述べたように「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」ということだけでは不十分である。そこで、5．2 節で述べた a~c 型のピッチパターンについての記述も考慮に入れ、複合語アクセント規則について考察すると、「文節の最終モーラだけが高い」b 型が観察されないことを説明可能な複合語アクセント規則として、以下のような二つの案が考えられる。

〈複合語アクセント規則案①〉

一つ目の案は、「前部要素が a 型の場合は a 型、前部要素が b 型と c 型の場合は c 型となる」とするものである。

この規則によれば、前部要素が a 型の場合、複合語全体も a 型（無核型：前から 1 モーラもしくは 2 モーラ目から上昇）となる（例 8）。ただし、4 節で述べたように無核型（a 型）

の複合語において「後部要素が３モーラ以上のときは、後部要素の前から２モーラ目（それが特殊モーラのときは１モーラ目）からピッチが上昇する」という規則も働く（「後ろ姿が」）。

（例８）「竹林が」　da[ki+buku=ga]　←　a 型「竹」　da[ki　/　da[ki=ga]
「上り坂が」　nu[bui+zaka=ga]　←　a 型「上り」　nu[bui　/　nu[bui=ga]
「後ろ姿が」　atu+ʃi[gata=ga]　←　a 型「後」　a[tu　/　a[tu=ga]

一方、前部要素が（文節の最終モーラのみが高くなる）b 型と c 型の場合、複合語全体はどちらも c 型（有核型：語の最終音節が高く現れ、その後で下降）となる（例９）。

（例９）「島国が」　ʃima+gu[ni:]=ga　←　b 型「島」　ʃima[:　/　ʃima:[=ga]
「山登りが」　jama+nu[bui]=ga　←　b 型　「山」　jama[:　/　jama:[=ga]
「下り坂が」　uri+za[ka]=ga　←　c 型　「下り」　u[ri　/　u[ri]=ga
「お釣り(余り銭)が」amari+zi[ni:]=ga　←c 型「余り」ama[ri　/　ama[ri]=ga

以上のように複合語アクセント規則①では、前部要素が a 型の場合は複合語全体も a 型、前部要素が b 型と c 型の場合は複合語全体が c 型となる。このとき、前部要素がどの型であっても複合語全体のアクセントに「文節の最終モーラだけが高い」b 型は現れ得ない。このことから、我部祖河方言において複合語アクセント規則①が機能する場合、a 型と c 型のアクセントしか出現せず、「文節の最終モーラのみが高くなる」b 型が見られなくなっていると考えることができる[4]。

〈複合語アクセント規則案②〉

二つ目の案は「複合語全体の型は前部要素の型と一致する」とするものである。

複合語全体が a 型（無核型：前から１モーラもしくは２モーラ目から上昇）の場合、前部要素も a 型となる(例８)。ただし、規則①と同様に、無核型（a 型）の複合語において「後部要素が３モーラ以上のときは、後部要素の前から２モーラ目（それが特殊モーラのときは１モーラ目）からピッチが上昇する」という規則も働く（「後ろ姿が」）。

---

[4] 複合語アクセント規則①の大きな問題とはならないものの、やや気になる点として前部要素が（文節の最終モーラだけが高い）b 型である複合語「親心」が挙げられる。この複合語では、uja:+gu[kuru]=ga と uja:+gu[kuru=ga]の二種類のアクセントが観察され、どちらも規則①からすると例外的な型である。前者は a~c のどの型にも当てはまらない例外的な語である。後者は規則①の例外とはなるが、4 節で述べた無核型の場合のピッチパターンとしては正しく実現されている。いずれにせよ、この語例だけで規則①に問題があるものとし、それを退けることはできないだろう。

（例８）「竹林が」　da[ki+buku=ga]　←　a 型「竹」　da[ki　/　da[ki=ga]
「上り坂が」　nu[bui+zaka=ga]　←　a 型「上り」　nu[bui　/　nu[bui=ga]
「後ろ姿が」　atu+ʃi[gata=ga]　←　a 型「後」　a[tu　/　a[tu=ga]

複合語全体が b 型（有核型：前から 3 モーラ目の後で上昇し、すぐに下降する）の場合、前部要素も b 型となる（例 10）。

（例 10）「島国が」　ʃima+gu[ni:]=ga　←　b 型「島」　ʃima[:　/　ʃima:[=ga]
「山登りが」　jama+nu[bui]=ga　←　b 型「山」　jama[:　/　jama:[=ga]
「花米が」　hana+gu[mi:]=ga　←b 型「花」　pana[:　/　pana:[=ga]
「雨傘が」　ama+ga[sa:]=ga　←b 型「雨」ami[:　/　ami:[=ga]

複合語全体が c 型（有核型：語の最終音節が高く現れ、その後で下降）の場合、前部要素も c 型となる（例 11）。

（例 11）「お釣り(余り銭)が」amari+zi[ni:]=ga　←c 型「余り」ama[ri　/　ama[ri]=ga
「心当たりが」kukuru+a[tai]=ga　←c 型「心」kuku[ru　/　kuku[ru]=ga
「近所づきあいが」ʃi:tune:+bi[re:]=ga　←c 型「近所」ʃi:tu[ne:　/　ʃi:tu[ne:]=ga

このとき、例 10 の複合語は c 型のアクセントとも一致する。このことから、我部祖河方言の複合語において、b 型（有核型：前から 3 モーラ目の後で上昇し、すぐに下降する）とされる語が c 型（有核型：語の最終音節が高く現れ、その後で下降）と同じアクセントで出現するため、二つのアクセント型が区別できなくなっていると考えられる。
ただし、前部要素の型について未調査である「分かれ道が」「隠し事が」「雨垂れ水が」の三つの語については問題が残る（例 12）。

（例 12）「分かれ道が」wakari+mi[tʃi]=ga
「隠し事が」kakuʃi+gu[tu]=ga
「雨垂れ水が」amadai+mi[zi]=ga

例 12 に示す複合語全体のアクセントは c 型であるため、前部要素「分かれ」「隠し」「雨垂れ」は c 型であると予測されるが、そうでない場合については、複合語アクセント規則②は成り立たないということになる。

今あるデータからは、我部祖河方言において、複合語アクセント規則①と複合語アクセント②のどちらが機能しているかについては決定できないものの、どちらの場合であっても

複合語アクセント規則が働いた結果、3 モーラまでの語に見られた「文節の最終モーラのみが高くなる」という意味での b 型は 4 モーラ以上の語で表面上見られなくなる、ということになる。つまり、我部祖河方言の複合語アクセントにおいて「4 モーラ以上の語では b 型が一つも観察されない」という現象が見られるのは、複合語アクセント規則①あるいは②のような規則が働いているためであると考えられる。

5．4　まとめ

我部祖河方言において「4 モーラ以上の語において b 型が一つも観察されない」という現象について考察した結果、その要因としては以下のようなことが考えられた。

まず単純語においては、b 型の語を「前から 3 モーラ目の後で上昇し、すぐに下降する」型とし、c 型を「語の最終音節が高く現れ、その後で下降」する型とした場合、4 モーラの語において表面上に現れるピッチパターンが b 型と c 型とで一致するため、二つのアクセント型が区別できなくなり、「文節の最終モーラのみが高くなる」b 型が無くなっているように見えてしまうと考えられる。

複合語においては、二つの複合語アクセント規則の案が考えられたが、どちらの場合であっても複合語アクセント規則が原因となり、3 モーラまでの語に見られた「文節の最終モーラのみが高くなる」という b 型が見られなくなっていると考えられた。

6．おわりに

本稿では、我部祖河方言の名詞アクセントについて記述した。我部祖河方言の単純語のアクセントは、「ピッチの下降の有無」と「ピッチの上昇位置の違い」によって分けられた a~c の三つの型の区別を持つ「三型アクセント」である。しかし、我部祖河方言の単純語アクセントにおける「三型アクセント」は一般的な N 型アクセントの体系とは異なり、「語の長さが増えると型の対立数が減る」という特徴を持つ。具体的には、3 モーラまでの名詞では三つの型の対立が見られるが、4 モーラ以上の場合には型の対立数が二つに減る。その点で、我部祖河方言の単純語のアクセントは特異であると言える。また、我部祖河方言では「複合語アクセントにおける下降の有無は、前部要素の型によって決まる」という現象が観察された。複合語の場合のピッチの上昇位置については、前部要素の型と後部要素のモーラ数により予測が可能である。

さらに本稿では、我部祖河方言において、単純語でも複合語でも 4 モーラ以上の語に「文節の最終モーラのみが高くなる」 b 型が一つも観察されないという現象についても議論した（5 節)。まず、複合語アクセントの分析から「a 型は無核型、b・c 型は有核型である」

と考え、3 節の a~c 型のピッチパターンを記述し直した。その結果、単純語の場合は、4 モーラ（以上）の語においては表面上に現れるピッチパターンが b 型と c 型とで一致してしまうため、二つのアクセント型が区別できなくなり、3 モーラまでの語に見られた「文節の最終モーラのみが高くなる」という b 型が無くなっているように見えてしまうと考えられることを述べた。一方、複合語の場合は二つの複合語アクセント規則の案が考えられるが、どちらの場合であっても複合語アクセント規則が原因となり、単純語の場合と同様に b 型が見られなくなっていると考えられる。

以上のように結論付けたが、実は調査した語の中には、ここまでに述べた体系・規則の中に組み込めない語がいくつか観察された。それらのアクセントは以下の通りである。

（無核型）「女の子」　ina[gungwa　/　ina[gungwa=ga]
（有核型）「一大事」　i[tʃideː]zi　/　i[tʃideː]zi=ga
「行き帰り」　i[kikeːri　/　i[kikeːri]=ga
「天気雨」　ti[daː]ami　/　ti[daː]ami=ga
「雀」　haː[ra]bjoːʃi　/　haː[ra]bjoːʃi=ga
「水中眼鏡」　u[mi]gantʃoː　/　u[mi]gantʃoː=ga
「親心」　ujaːgu[kuru　/　ujaːgu[kuru]=ga
「昔話」　mukaː[ʃi]ba]naʃi　/　mukaː[ʃi]ba]naʃi=ga

上記の語は無核/有核の区別は可能であるが、本稿で述べた a~c 型のいずれのアクセント型にも当てはまらない語である。そのほとんどは 5 モーラ以上の複合語で、ピッチの下降が二度生じている「昔話」を筆頭に、完全な 1 語になっていないように思われるものばかりである。そうした点から、これらが本稿で示した体系や規則に収まらないことを説明できそうではあるが、その詳細について述べるにはデータが少なく検討が不十分である。長いモーラ数の複合語を中心に、さらにデータを追加して検討する必要がある。

参考文献

五十嵐陽介(2017)「「琉球語アクセント調査票 160」：琉球語アクセント体系の初期調査を目的とした 160 の調査語」一橋大学大学院社会学研究科博士課程ゼミ発表レジュメ.2017 年 5 月 30 日.

上野善道（2012）「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1)：44-62.

上野善道（2018）「これまでの琉球方言アクセント研究とこれから」119（11）：97-108.

上野善道（2020a）「久米島方言の体言のアクセント資料―那覇語彙(1)―」『琉球の方言』(44):189-241.法政大学沖縄文化研究所.

上野善道（2020b）「那覇市方言の名詞のアクセント体系――大湾政和の論著から読み取る――」『方言の研究』6：5-33.

小川晋史（2012）『今帰仁方言アクセントの諸相』東京：ココ出版.

木部暢子（2019）「方言のアクセント」木部暢子（編）『明解方言学辞典』137. 東京：三省堂.

児玉望 (2014)「名護方言の二つの音声資料の韻律分析」『ありあけ　熊本大学言語学論集』13:21-56. 熊本大学文学部言語学研究室.

仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典―今帰仁方言の研究・語彙篇―』東京：角川書店.

服部四郎 (1937)「琉球語管見」『方言』7 (10) (服部 1959『日本語の系統』岩波書店 pp.362-375 に再録)

Lawrence, Wayne Patric（1990）Nakijin Phonology: Feet and extrametricality in a Japanese dialect. Unpublished doctoral dissertation, University of Tsukuba.

Uwano, Zendo（2018）Accentual Neutralization in Japanese Dialects. Kubozono, Haruo & Giriko, Mikio(eds.) *Tonal Change and Neutralization,* 129-155.

【資料】我部祖河方言名詞アクセント一覧

本稿で筆者が調査した名詞のうち、分析に使用したもののみ記載する。また、助詞は「が」で表し、述語については省略する。a~c 型のいずれにも当てはまらない語については、無核/有核のいずれかで表す。

〈2 モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
後（あと）	ア[トゥ	ア[トゥが]	a
飴	ア[ミ	ア[ミが]	a
行き	イ[キ	イ[キが]	a
石	イ[シ	イ[シが]	a
石	[イシ	[イシが]	a
西	イ[リ	[イリが]	a
上	[ウイ	[ウイが]	a
牛	ウ[シ	ウ[シが]	a
川	[カー	[カーが]	a
井戸	[カー	[カーが]	a
泉	[カー	[カーが]	a
風	カ[ジ	カ[ジが]	a
風	[カジ	[カジが]	a
毛	[キー	[キーが]	a
錐	キ[リ	キ[リが]	a
腰	ク[シ	ク[シが]	a
腰	ク[シ	[クシが]	a
口	ク[チ	ク[チが]	a
子	[クゥー	[クゥーが]	a
酒	サ[キ	サ[キが]	a
酒	[サキ	[サキが]	a
下	シ[チャ	シ[チャが]	a
袖	ス[ディ	ス[ディが]	a

丈	タ[キ	タ[キが]	a
竹	ダ[キ	ダ[キが]	a
竹	[ダキ	[ダキが]	a
血	[チ—	[チ—が]	a
人	[チュー	[チューが]	a
妻	トゥ[ジ	トゥ[ジが]	a
妻	[トゥジ	[トゥジが]	a
名前	[ナー	[ナーが]	a
夏	[ナチ	ナ[チが]	a
夏	[ナチ	[ナチが]	a
北	ニ[シ	ニ[シが]	a
北	[ニシ	[ニシが]	a
蚤（のみ）	ヌ[ミ	ヌ[ミが]	a
葉	[パー	[パーが]	a
橋	パ[シ	パ[シが]	a
橋	パ[シ	[パシが]	a
におい	ハ[ジャ	ハ[ジャが]	a
におい	[ハジャ	ハ[ジャが]	a
紙	ハ[ビ	ハ[ビが]	a
紙	ハ[ビ	[ハビが]	a
紐	[ヒモ	[ヒモが]	a
帆	[フー	[フーが]	a
果実	[ミ—	[ミ—が]	a
水	ミ[ジ	ミ[ジが]	a
魚	[ユー	[ユーが]	a
時代	[ユー	[ユーが]	a
梢	ユ[ダ	ユ[ダが]	a
梢	[ユダ	ユ[ダが]	a
皮	カ[ー	カー[が]	b
木	キ[ー	キー[が]	b
蜘蛛	ク[モ	クモ[が]	b
身長	シ[ニ	シニ[が]	b

手	チ[ー	チー[が]	b
肝	チ[ム	チム[が]	b
心	チ[ム	チム[が]	b
苗	ネ[ー	ネー[が]	b
歯	パ[ー	パー[が]	b
火	ピ[ー	ピー[が]	b
穂	プ[ー	プー[が]	b
南	ヘ[ー	ヘー[が]	b
目	ミ[ー	ミー[が]	b
家	ヤ[ー	ヤー[が]	b
世	ユ[ー	ユー[が]	b
湯	ユ[ー	ユー[が]	b
朝	ア[サ	ア[サ]が	c
下り	ウ[リ	ウ[リ]が	c
影	カ[ギ	カ[ギ]が	c
組	ク[ミ	ク[ミ]が	c
坂	サ[カ	サ[カ]が	c
中	ナ[ハ	ナ[ハ]が	c
骨	プ[ニ	プ[ニ]が	c
冬	プ[ユ	プ[ユ]が	c
松	マ[チ	マ[チ]が	c
前	[メー	[メー]が	c
豚	[ワー	[ワー]が	c

〈3 モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
東	ア[ガリ	ア[ガリが]	a
東	[アガリ	ア[ガリが]	a
あくび	ア[クビ	ア[クビが]	a
息	イ[キー	イ[キーが]	a
息	[イキー	[イキーが]	a
イカ	イ[チャー	イ[チャーが]	a

臼	ウ[スー	ウ[スーが]	a
踊り	ウ[ドゥイ	ウ[ドゥイが]	a
形	カ[タチ	カ[タチが]	a
かまど	カ[マドゥ	カ[マドゥが]	a
かまど	[カマドゥ	カ[マドゥが]	a
瓶(かめ)	カ[ミー	カ[ミーが]	a
煙	キ[ブシ	キ[ブシが]	a
鎖	ク[サリ	ク[サリが]	a
国	ク[ニー	ク[ニーが]	a
麹	[コージ	[コージが]	a
桜	サ[クラ	サ[クラが]	a
地震	[ジシン	ジ[シンが]	a
二つ	[ターチ	[ターチが]	a
力	チ[カラ	チ[カラが]	a
膝	[チンシ	[チンシが]	a
日	ティ[ダー	ティ[ダーが]	a
寝言	ニ[グトゥ	ニ[グトゥが]	a
上り	ヌ[ブイ	ヌ[ブイが]	a
鑿（のみ）	ヌ[ミー	ヌ[ミーが]	a
初め	パ[ジミ	パ[ジミが]	a
初め	[パジミ	[パジミが]	a
鼻	パ[ナー	パ[ナーが]	a
鼻	[パナー	[パナーが]	a
鼻血	パ[ナヂ	パ[ナヂが]	a
畑	パ[ル―	パ[ル―が]	a
にんにく	ピ[ル―	ピ[ル―が]	a
筆	フ[ディー	フ[ディーが]	a
甘酒	ミ[キー	ミ[キーが]	a
三つ	[ミーチ	[ミーチが]	a
六つ	[ムーチ	[ムーチが]	a
八つ	[ヤーチ	[ヤーチが]	a
四つ	[ユーチ	[ユーチが]	a

雨	アミ[ー	アミー[が]	b
網	アミ[ー	アミー[が]	b
板	イチャ[ー	イチャー[が]	b
糸	イチュ[ー	イチュー[が]	b
胸	イニ[ー	イニー[が]	b
腕	ウディ[ー	ウディー[が]	b
海	ウミ[ー	ウミー[が]	b
親	ウヤ[ー	ウヤー[が]	b
傘	カサ[ー	カサー[が]	b
着物	キヌ[ー	キヌー[が]	b
草	クサ[ー	クサー[が]	b
糞	クス[ー	クスー[が]	b
力	グテ[ー	グテー[が]	b
米	クミ[ー	クミー[が]	b
雲	クム[ー	クムー[が]	b
銭	ジニ[ー	ジニー[が]	b
島	シマ[ー	シマー[が]	b
村	シマ[ー	シマー[が]	b
汁	シル[ー	シルー[が]	b
蛸	タク[ー	タクー[が]	b
角（つの）	チヌ[ー	チヌー[が]	b
命	チヌ[ー	チヌー[が]	b
舌	ツバ[ー	ツバー[が]	b
涙	ナバ[ー	ナバー[が]	b
波	ナミ[ー	ナミー[が]	b
肩	ハタ[ー	ハターー[が]	b
花	パナ[ー	パナー[が]	b
茅（かや）	ハヤ[ー	ハヤー[が]	b
去年	フジュ[ー	フジュー[が]	b
豆	マミ[ー	マミー[が]	b
土	ミチャ[ー	ミチャー[が]	b
貝	ミナ[ー	ミナー[が]	b

耳	ミミ[一	ミミ一[が]	b
麦	ムギ[一	ムギ一[が]	b
餅	ムチ[一	ムチ一[が]	b
山	ヤマ[一	ヤマ一[が]	b
夜（ヨ）	ユル[一	ユル一[が]	b
仕事	ワジャ[ー	ワジャー[が]	b
藁	ワラ[一	ワラ一[が]	b
あせも	アシ[ブ	アシ[ブ]が	c
余り	アマ[リ	アマ[リ]が	c
雨戸	アミ[ドゥ	アミ[ドゥ]が	c
女	イナ[グ	イナ[グ]が	c
犬	イヌ[クゥ	イヌ[クゥ]が	c
フケ	イリ[キ	イリ[キ]が	c
うさぎ	ウサ[ギ	ウサ[ギ]が	c
鰻	ウナ[ギ	ウナ[ギ]が	c
表	ウム[ティ	ウム[ティ]が	c
恨み	ウラ[ミ	ウラ[ミ]が	c
鱗	ウル[ク	ウル[ク]が	c
菜	オー[パ	オー[パ]が	c
鏡	カガ[ミ	カガ[ミ]が	c
蚊	ガジャ[ミ	ガジャ[ミ]が	c
バッタ	ガー[タ	ガー[タ]が	c
兜	カブ[ト	カブ[ト]が	c
川	カー[ラ	カー[ラ]が	c
黄金	クガ[ニ	クガ[ニ]が	c
釘	クー[ギ	クー[ギ]が	c
心	ククル	ククル]が	c
力	グ[テー	グ[テー]が	c
車	クル[マ	クル[マ]が	c
ふくらはぎ	クン[ダ	クン[ダ]が	c
帰り	ケー[リ	ケー[リ]が	c
暦	コヨ[ミ	コヨ[ミ]が	c

刺身	サシ[ミ	サシ[ミ]が	c
猿	サー[ル	サー[ル]が	c
姿	シガ[タ	シガ[タ]が	c
ざる	ジョー[キ	ジョー[キ]が	c
宝	タカ[ラ	タカ[ラ]が	c
太陽	ティ[ダー	ティ[ダー]が	c
一つ	ティー[チ	ティー[チ]が	c
背中	ナガ[ニ	ナガ[ニ]が	c
情け	ナサ[キ	ナサ[キ]が	c
キノコ	ナー[バ	ナー[バ]が	c
鍋	ナ[ビー	ナ[ビー]が	c
七日	ナン[カ	ナン[カ]が	c
ざる	バー[キ	バー[キ]が	c
はさみ	パサ[ミ	パサ[ミ]が	c
刀	ハタ[ナ	ハタ[ナ]が	c
話	ハナ[シ	ハナ[シ]が	c
亀	ハー[ミ	ハー[ミ]が	c
柱	パ[ヤー	パ[ヤー]が	c
瓦	ハー[ラ	ハー[ラ]が	c
籠(かご)	ピャー[ギ	ピャー[ギ]が	c
鳥(飛ぶ)	ビョー[シ	ビョー[シ]が	c
袋	プッ[ク	プッ[ク]が	c
肩	ヘン[ナ	ヘン[ナ]が	c
枕	マッ[カ]	マッ[カ]が	c
婿	ムー[ク	ムー[ク]が	c
箸	メー[シ	メー[シ]が	c
よだれ	ユー[ディ	ユー[ディ]が	c
宿	ヤ[ドゥー	ヤ[ドゥー]が	c
ひつじ	ヒツ[ジ	ヒツ[ジ]が	c
仏	フトゥ[キ	フトゥ[キ]が	c
緑	ミドゥ[リ	ミドゥ[リ]が	c
百足	ムカ[ジ	ムカ[ジ]が	c

大和（日本本土）	ヤマ[トゥ	ヤマ[トゥ]が	c

〈4 モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
暗闇	ク[ラサミ	ク[ラサミが]	a
盃	サ[カズキ	サ[カズキが]	a
袖口	ス[ディグチ	ス[ディグチが]	a
竹林	ダ[キブク	ダ[キブクが]	a
釣竿	[チンブク	[チンブクが]	a
鍋がね	ナ[ビガニ	ナ[ビガニが]	a
鼻水	パ[ナダイ	パ[ナダイが]	a
稲こぎ	イニク[ギ	イニク[ギ]が	b/c
下り坂	ウリザ[カ	ウリザ[カ]が	b/c
硯箱	シミバ[ク	シミバ[ク]が	b/c
虱	シラー[ミ	シラー[ミ]が	b/c
都	マチガ[タ	マチガ[タ]が	b/c
ミミズ	ミミン[ジャ	ミミン[ジャ]が	b/c
昔	ムカー[シ	ムカー[シ]が	b/c
物忘れ	ムヌワ[シ	ムヌワ[シ]が	b/c
田舎（やんばる）	ヤンバ[ル	ヤンバ[ル]が	b/c
朝食	アサム[ヌ	アサム[ヌ]が	c
油	アン[ダー	アン[ダー]が	c
夫	ウッ[トゥー	ウッ[トゥー]が	c
かかと	カカ[トゥー	カカ[トゥー]が	c
カラス	ガラ[サー	ガラ[サー]が	c
メガネ	ガン[チョー	ガン[チョー]が	c
砂糖	サー[ター	サー[ター]が	c
唾	ジュン[ペー	ジュン[ペー]が	c
唾液	ジュン[ペー	ジュン[ペー]が	c
白髪	シラ[ガー	シラ[ガー]が	c
兄弟	チョー[デー	チョー[デー]が	c
包丁	ホー[チャー	ホー[チャー]が	c

果実(生り物)	ナイ[ムン	ナイ[ムン]が	c
肩車	マー[クイ	マー[クイ]が	c
雌鶏	ミー[ドゥイ	ミー[ドゥイ]が	c
腹	ワッ[ター	ワッ[ター]が	c
子供	ワラ[ビー	ワラ[ビー]が	c

〈5モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
後ろ姿	アトゥシ[ガタ	アトゥシ[ガタが]	a
生まれつき	ウ[マリガチ	ウ[マリガチが]	a
生まれ年	ウ[マリドゥシ	ウ[マリドゥシが]	a
生まれ年	[ウマリドゥシ	[ウマリドゥシが]	a
（天井から下げる）ざる	サギ[ジョーキ	サギ[ジョーキが]	a
立ち話	タチバ[ナシ	タチバ[ナシが]	a
上り坂	ヌ[ブイザカ	ヌ[ブイザカが]	a
（平らな）ざる	ムイ[ジョーキ	ムイ[ジョーキが]	a
雨傘	アマガ[サー	アマガ[サー]が	b/c
糸芭蕉	イトゥバ[ショー	イトゥバ[ショー]が	b/c
くいしんぼう	ガキマ[ヤー	ガキマ[ヤー]が	b/c
組踊り	クミウ[ドゥイ	クミウ[ドゥイ]が	b/c
近所	シートゥ[ネー	シートゥ[ネー]が	b/c
島口	シマグ[チー	シマグ[チー]が	b/c
島国	シマグ[ニー	シマグ[ニー]が	b/c
裏道	ツージ[グゥー	ツージ[グゥー]が	b/c
花笠	ハナガ[サー	ハナガ[サー]が	b/c
花米	ハナグ[ミー	ハナグ[ミー]が	b/c
物思い	ムヌウ[ムイ	ムヌウ[ムイ]が	b/c
山登り	ヤマヌ[ブイ	ヤマヌ[ブイ]が	b/c
夜中	ユーナ[ハー	ユーナ[ハー]が	b/c
隠し事	カクシグ[トゥ	カクシグ[トゥ]が	c
分かれ道	ワカリミ[チ	ワカリミ[チ]が	c
女の子	イナ[グングゥ	イナ[グングゥが]	無核

往復（行き帰り）	イ[キケーリ	イ[キケーリ]が	有核
一大事	イ[チデー]ジ	イ[チデー]ジが	有核
天気雨	ティ[ダー]アミ	ティ[ダー]アミが	有核

〈6モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
親心	ウヤーグ[クル	ウヤーグ[クルが]	a
作り話	ツクイバ[ナシ	ツクイバ[ナシが]	a
お釣り（余り銭）	アマリジ[ニー	アマリジ[ニー]が	c
心当たり	ククルア[タイ	ククルア[タイ]が	c
力仕事	グテーワ[ジャー	グテーワ[ジャー]が	c
十六日	ジュールクニ[チ	ジュールクニ[チ]が	c
水中眼鏡	ウ[ミ]ガンチョー	ウ[ミ]ガンチョーが	有核
親心	ウヤーグ[クル	ウヤーグ[クル]が	有核
雀	ハー[ラ]ビョーシ	ハー[ラ]ビョーシが	有核

〈7モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
昔話	ムカー[シ]バ]ナシ	ムカー[シ]バ]ナシが	有核

〈8モーラ〉

単語	我部祖河	我部祖河(助詞付き)	型
近所づきあい	シートゥネービ[レー	シートゥネービ[レー]が	c